

# 1 自己評価及び外部評価結果

## 【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4590100402		
法人名	宮崎医療生活協同組合		
事業所名	グループホームにじの樹 1号館		
所在地	宮崎市和知川原2丁目25-1		
自己評価作成日	令和3年7月20日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/45/index.php">http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/45/index.php</a>
----------	---

## 【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	一般社団法人 宮崎県介護福祉士会		
所在地	宮崎県宮崎市原町2-22 宮崎県福祉人材センター人材研修館内		
訪問調査日	令和3年10月13日		

## 【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

同敷地内に連携がとれるクリニックと訪問看護ステーションがあり、利用者・ご家族からも安心して過ごしていただけている。職員も、医療面での相談をしやすい環境であり、安心できている。以前は近くの交差点で登校班の見守りを利用者とともにいたり、オレンジカフェを開催するなど、地域の方々の交流があったが、コロナ禍で実施できていない。外出がままならない中、利用者の方々に季節を感じていただけるよう、毎月の行事を工夫している。毎日のケアは、利用者の尊厳を守ることを第一に考え、言葉かけなどにも注意を払い、職員間で話し合いを密に行っている。

## 【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

ホームは隣接する系列のクリニックと、訪問看護ステーションとの連携を取りやすい環境にある。協力医の定期的な往診や急変時の相談・対応及び訪問看護による適切な医療管理が得られ、入居者や家族が安心して暮らしを提供できている。コロナ禍により、地域に出かけたり家族や馴染みの方の訪問に制限を設けているが、感染予防対策を講じた上で家族や地域との繋がりを継続できるようガラス越しの面会やテレビ電話での会話、近隣の散歩など工夫を行っている。管理者及び職員は、言葉かけに尊敬の念をもって対応し、入居者の誇りやプライバシーを損ねないよう努めている。ご飯と汁物はホームで作れ、美味しそうな香りと音に家庭的な雰囲気を感じながら、食事の時間を楽しみにされている。月に1~2回職員と一緒に、入居者もできる範囲で調理やおやつ作りを行って楽しい時間を過ごしている。

## V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

# 自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	施設内の壁に理念を掲示し、内容を理解し、利用者の尊厳を第一に考え、日々の支援に取り組んでいる。	入居者の尊厳を第一に、地域の中でその人らしい暮らしが続けられるように支援する理念を作成し、施設内の壁に掲示している。職員は入居者に寄り添った支援を心がけているが、理念の共有が徹底していない。	管理者と職員が共に協議し理念を作り上げ、定期的なケアの見直しを行うことで、共有した理念を実践に繋げることを期待したい。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍で積極的に交流は出来ないが、近所のスーパーへ買い物に行ったり、散歩をしたりする中での関りは持っている。	コロナ禍による外出制限のなか、感染予防対策を十分に行った上で近隣への買い物や近くの公園まで出かける等、地域との交流を支援している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	認知症カフェを開催していたが、コロナ禍で開催出来ず、貢献は出来なかった。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナ禍で運営推進会議への開催が難しかったが、手紙や電話でのやり取りで意見の交換を行った。	コロナ禍で開催できない時は文書を送り意見や助言等を貰っている。今年7月は運営推進会議を開催しホームの状況報告を行い、地域の情報を得るなど意見交換を行った。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	サービス提供について疑問があれば、市担当者に伝えている。市の事業については、コロナ禍で協力ができなかった。包括とは、地域の実情やコロナ禍でのサロン開催などについて情報交換を行っている	市担当者に日頃からホームの実情や取り組みを報告している。転居してきた方の入居に伴う手続きの相談や、市主催の研修会に役員として関わる相談を行うなど、協力関係が築かれている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	明らかな身体拘束は行っていない。身体拘束に繋がっていくのではないかと、不適切なケアではないかと常に職員同士で小さなことから改善できるよう話し合いを行っている。	職員会議で、グレーゾーンの言葉かけについて話し合い、言葉による拘束をしないケアに取り組んでいる。離設者の対応ではアクションカードを用いて、入居者の思いに寄り添うことで安全を確保しつつ、自由な生活を支援している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待防止について学習会を行い、見過ごすことがないように意識を高めている。また、自分たちの声掛け一つにも、それでいいのか？ と疑問を持つようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見制度を利用している利用者を通じて、制度がどんなものかを職員間で共有している。また、成年後見人とは連絡を密にし、利用者が様々な場面で不利益を被らないように支援している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には時間を十分にとって説明を行い、同意を得ている。改定時には、利用者ご家族へ説明を行い、同意を得ている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	コロナ禍で、家族会の開催が出来ず、また面会もままならない時期ではあったが、電話や手紙などで近況を細かに伝え、お返事をいただくこともあった。	家族会が結成されているがコロナ禍で開催できず、電話や手紙、ホーム便りなどで入居者の健康状態や、暮らしぶりを伝えている。出された意見や要望に対してすぐ協議し、改善する努力をしている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員会議で意見を出してもらい、すべて決定するようにしている。職員主体で行う行事や個別支援については、提案をだしてもらい、職場全体で協力するようにしている。	管理者は職員会議で意見や提案を聞くようにしている。悩みや不安のある職員にはアドバイスをを行うなど、意見の言える雰囲気作りに努めている。必要に応じて代表者に報告し、職員の意見を反映する努力をしている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	給与水準は就業規則による。管理者が面談を行い、やりがいや向上心をもって働いてくださるよう環境整備などに努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	資格取得のバックアップや、研修参加を促している。昨年度は研修自体が中止になったケースが多かったが、今年度はWEBでの研修に参加できている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	昨年度はコロナ禍で交流が全くできなかった。今年度に入り、法人内での研修や学習会などでの交流が復活しつつある。6月には法人内での交流会を通じ、他事業所の取り組みについて知る機会を設けた。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前には必ず面会に行き、ご本人の声を聞き、家族やケアマネなどから情報を得ている。入居までにユニットで話し合いを何度か行い、入居前から支援をイメージし、利用者が安心して生活が始められるようにしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族がどんなことに不安を感じているか、よく聞き取り、支援のイメージをお伝えし不安がないようにしている。入居直後はご本人の様子を小まめに連絡し、更なる要望はないか希望を聞いている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	家族やご本人の困りごとに着目し、当事業所を利用する前のケアマネや事業所からも情報をいただきながら、対応に努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	掃除や料理など、ご本人のできることに着目し、一緒に取り組む中で、信頼関係を構築している。また、一見困った行動にも何か意味があると考え、すぐには制止せず、感謝の気持ちを伝えるようにしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナ禍で今までのような面会はかなわないが、ご家族にしかできない支援の在り方があると考え「コロナ収束になったら」などの提案をしつつ、施設内での支援にも取り組んでいる。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	従来なら、出来る方は自宅へ一緒に帰宅して時間を過ごしたり、近所へ出かけたりしていたが、今はコロナ禍で、テレビ電話や十分な距離をとった面会などの支援しか実現できていない。	コロナ禍で面会者も少なくなっているが、同建物内のデイサービスを利用されている姉妹とガラス越しの面会や、美容師さんの来訪により馴染みの関係性が継続できる支援を行っている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	関係を把握し、席順には配慮している。また、利用者同士が時間を共有できるよう、職員主体とならないよう配慮している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	死亡での終了がほとんどだが、終了してもお知り合いを紹介されたり、関係が途切れない方もいる。ただ、コロナ禍で、現在は施設に訪れる方はいない。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日頃の会話の中で希望や意向を伺い支援に反映できるように努めている。困難な場合は、言動などで思いを汲み取り職員間で話し合いなどを行いながら本人本位のケアができるように努めている。	職員は言葉かけに配慮し、入居者の言動や表情、行動を観察して本人の思いや意向の把握に努めている。またセンター方式(認知症の人のためのケアマネジメント)を利用し、情報の収集に取り組んでいる。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	センター方式を活用し、生活歴やなじみの暮らし方、環境などの把握に努めている。また、ご家族にもシートの記入をお願いし、これまでの経過の把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	センター方式を活用し有する力の把握に努めている。一日の過ごし方は、記録に残し申送りで職員間で共有している。毎日の食事と水分摂取や排泄の記録を残し健康状態の把握にも努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	日頃からカンファレンスを小まめに行い、アイデアを出し合い、介護計画作成に活かしている。ご家族や御本人の意向も取り入れ、到達可能な計画を作るよう心掛けている。	センター方式(認知症の人のためのケアマネジメント方式)を活用し、入居者毎の担当職員と計画作成担当者が一緒にモニタリングを行っている。本人や家族の意向を確認し、現状に即した介護計画を作成している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	介護計画の実践状況や経過、日々の気づきなどを記録に残し、職員間で情報を共有しながら実践や見直しに活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	必要に応じて法人内外の医療機関や薬局、包括などに相談し助言をいただくようにしている。特に、成年後見制度を利用している身寄りのない利用者に対して、自分たちですべて決めてしまわず、多方面から意見をいただくようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ禍で、地域の方々のお力を借りる場面や、利用者が地域へ出かける機会がなくなっている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	同敷地内の内科が往診に月二回、日々の健康管理について助言して頂けている。また、訪問看護とも連携を図り、利用者の健康管理を行っている。春には利用者の健康診断を行い、結果について、主治医から家族に説明をしている。	敷地内に医療機関があり、本人や家族が希望するかかりつけ医となっている。月2回、主治医の往診と、系列の訪問看護の他に歯科訪問診療も取り入れ、適切な医療が受けられるよう支援している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	主治医にすぐに連絡をしていただける環境であるため、対応は早い。往診のクリニックと連携の訪問看護双方の看護師に、気づきや相談を行っている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には、入院先のケースワーカーと連絡を取り合い、環境が変わってもできるだけ利用者が混乱しないよう情報を共有するようにしている。コロナ禍で面会ができないため、電話での連絡を密にした。また、家族へ相談内容などを伝え、不安のないようにした。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	契約の時、終末期の在り方についての意向をお伺いしている。また、今までの看取りの経験をお話しつつ、できることをお伝えしている。看取りの段階には、医療従事者の意見を取り入れつつ、施設だけで完結しないように配慮している。	重度化や終末期のあり方について、ホームの看取りの経験を踏まえた上で、できることを説明し本人や家族の意向を確認している。年1回健康診断を実施し結果の説明時、意向を再確認している。職員と医療従事者は方針を共有し、協力体制ができている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時の対応の仕方を施設内に掲示している。必要に応じて学習会を行っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	避難訓練は定期的に行っている。BCPを作成し、職員で見直しを行っている。地域の防災訓練はコロナで開催されなかったが、毎年参加し、顔の見える関係作りを行っている。	避難訓練や会館全体で行う総合防災訓練を実施し、防災マニュアルや事業継続計画も定期的に見直している。毎年参加している地域の防災訓練はコロナ禍で休止中だが、自治会長はホームの訓練に協力的である。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者の行動を止めたりせず、どんな意味があるのかを推察するようにしている。声掛けは、一人の人として尊重されるような声掛けを行うよう配慮している。	職員は言葉かけに尊敬の念をもって対応し、誇りやプライバシーを損ねないように努めている。自己決定できるような言葉かけを行い、入居者の意向を尊重した対応を心がけている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者が自己決定ができるような場面を作るよう工夫している。朝起きた時、入浴時の着替えや、好みの飲み物の選択など。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	起床時間や就寝時間など、その人のペースに合わせて職員が介助している。遅くまでテレビが見たい方には、ゆっくりと楽しんでいただいている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	洗面、整容は出来るだけ自分でできるように配慮し、服は二者択一で着たい服を選んでいただけるようにしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	コロナ以前は、職員も同じテーブルで食事を一緒に楽しんでいましたが、今は同席することはない。食事作りは定期的に、片付けは食事後に利用者とともにっており、会話が弾むよう心がけている	入居者はできる範囲で下膳やお盆拭き、片付けを行っている。月1~2回入居者と職員と一緒に調理やおやつ作りを行い、食材の皮むきや下拵え、盛り付けを担当し楽しい時間を過ごしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事・水分量は記録し、必要に応じて主治医に相談を行っている。その人の嗜好に合った飲み物が提供できるようにしている。栄養状態は体重や採血の結果で判断し、主治医に相談している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後口腔ケアを行っている。出来る方には歯ブラシを持っていただき、できるだけ自分で行えるようにし、磨き残しなどあれば職員が介助に入る。必要な方には歯科往診をお願いしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	自分から排泄の訴えがない方は、時間で誘導してなるべくトイレで排せつができるようにしている。行動で排泄の訴えをされる方には、十分な観察を行い、トイレへ誘導し、恥ずかしい思いをされないようにしている。	センター方式用紙を活用し、入居者の排泄パターンを把握したり、サインを見逃さないよう努めている。トイレ誘導を行い、排泄の自立に向けた支援が行われている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便スケールを用い、状態を把握している。乳酸菌飲料などを取り入れ、なるべくお薬に頼らずに自然な排便ができるよう対策を講じている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	せかしたり、嫌がる方を無理やり入れたりせず、ゆっくりと入浴をしていただくよう配慮している。そのため、入浴の回数が少ないが、足浴や小まめな着替えをしていただけるよう心がけている。	入居者の希望やタイミングに合わせて、午前と午後で入浴を行っている。定期的に入浴剤を使い気分転換を図るなど、ゆっくりとお風呂を楽しんでもらうことを心がけて支援している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	遅くまでテレビを見ていたい方には見ていただいたり、もともとの起床時間が早い方、遅い方など、その人の時間に合わせている。昼食後も休息がとれるよう、工夫している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	主治医、看護師、調剤薬局と連携をとり、内服薬の相談を行えるようにしている。お薬の内容が変わった時は、効果について報告を行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	生活歴を十分に把握し、今の生活に活かせるよう支援したり、役割を発揮できるよう支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	月ごとに行事を行い、季節を感じていただけるよう工夫している。春や秋には、花を見に個別に外出している。コロナ以降は家族と一緒にの外出は行っていない。	コロナ禍により日常的な外出支援は制限されるが、近くの公園まで散歩に出かけている。緊急事態宣言が緩和された時は、季節に合わせて屋外に出かけ気分転換を図っている。	



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	外出して買い物を行う機会がなく、お金の所持や使う支援を行えていない。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	コロナ禍でもあり、面会が難しいため、必要に応じてテレビ電話ができるよう支援している。ご家族からの手紙は職員が代読している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節に応じた壁面を作成したり工夫している。特別な日には、花を飾ったり、気分転換も行っている。異食事故防止のため、利用者の手の届く壁は飾りはせずにつきりとさせている。テレビの音やトイレのにおいには十分に注意しており、異臭はない。	食堂を兼ねたフロアは、テーブルの配置や明るさに配慮され、ゆったりした時間を過ごせるよう工夫がされている。壁には入居者と職員が一緒に作り上げた季節感のある作品が掲示され、臭いや刺激音にも配慮するなど居心地の良い空間作りに努めている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ソファなどで、ゆっくりとくつろげるよう工夫している。畳の間で好きな時間に横になられる利用者もいる。席順にも配慮している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	家族の写真を飾ったり、昔使っていたものを持ち込んだり、居心地よく過ごせるよう工夫している。ご家族の仏壇を持ち込まれている利用者には、毎朝手を合わせる支援もしている。	家族の写真や思い出の品が飾られ、馴染みのある家具や仏壇を持ち込んで、安心した暮らしができるよう配慮されている。居室の入り口に名札や折り紙の作品が掲げられている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	建物内には構造上三段の階段上の段差があるが、段差を認識しやすい工夫をし安全確保を行っている。水道の蛇口はひねり式にし、自分で操作ができるようにしている。		